

日本人学生と留学生の異文化交流

異文化接触、協働的活動を通じた大学教育への適応と意識変容

北海学園大学人文学部教授 中川 かず子

NAKAGAWA Kazuko

本稿は、2000年、2002年、2007年に発表した「日本人大学生と留学生の異文化接触と大学教育への適応」、「異文化接触による相互の意識変容」（神谷順子氏との共同執筆論文）というテーマの一連の研究の総括である。「日本人学生と留学生の接触経験」の有無が大学教育への適応と彼らの価値観と行動にどう影響を与えているのか、また、協働的活動により相互の意識変容がどうなされたのか、といった点を中心に分析・考察を行なったものである。

中川・神谷（2000）では、日本人学生の大学教育への適応度と価値観（意識）に対する調査を行ない、その中で、留学生と接触のある学生群のほうに大学教育に対する高い適応度が示された。そこで、神谷・中川（2002）では異文化接触のある学生群に焦点を当て、異文化接触経験が日本人学生にどのような変容をもたらすのかについて、彼らの行動面にどう現われているか、また、行動を規定している価値思考との関連で検討した。さらに、神谷・中川（2007）では、異文化交流や留学生支援から留学生と日本人学生の協働的活動へと展開していく中で、双方がどう影響し合い、変容を遂げていくかを、具体的な協働的活動事例の分析を通して検討した。なお、本文中、「接触」という研究用語を用いているが、論文表題の「交流」という用語も広義の同意味として捉える。

1. 日本人学生と留学生の異文化接触 その1－大学教育への適応

日本における留学生の異文化接触研究として、岩男・萩原（1988）の留学生の日本社会に対するイメージの研究がその草分け的なものとして挙げられる。留学生の属性による違いはあるものの、滞在年数が増えることによりイメージがよくなるとは限らないこと、留学生の対人関係を中心に諸要因が連関していることなどが縦断的研究により示された。その後、「留学生の日本文化への適応」が研究の中心となり、不適応要因がホスト文化に関わるもの、特に日本人との対人関係形成にあることも報告されている（上原 1988, 1992 ほか）。日本への適応を促進させる要因としてのサポートネットワークの形成も重要であるという（田中 2000；水野 2003；横田 1998）。また、日本人チューターと留学生との親密化に関する研究では、横田（1991）や田中（1996）があり、その後も多くの教育機関でチューターと留学生を巡る実践的研究が行なわれている。さらに、文化変容ストレスについて異文化接触の深度を問題にした倉地（1998）の研究などがある。

一方、異文化接触の効果として星野（1992）は、文化的葛藤を経ながらも「複眼的な見方」「対処能力」「コミュニケーション能力」などをもたらすと述べている。また、

中川・神谷（2000）、加賀美（2007）ほかの研究において、日本人学生にとって留学生との接触経験が学業、生活面における積極性を促す要因になっていることが報告されている。

中川・神谷（2000）では日本人学生の大学教育への適応尺度として R. Baker による FSA（注1）を改訂した尺度を用い、①研究・学習の進捗状況、②自身の大学の教育の価値、③大学のゼミ、授業が効果的、④大学で自身の勉強に満足、⑤ゼミ教員との関係、⑥他の教員との関係、⑦留学生との接触、⑧留学生の友人——の各項目について4件法（1適応～4不適応）で回答を求めた。さらに、ホフステードの4次元価値観（注2）の枠組みを基本に、教育の目的、対人関係、集団との関わり、コミュニケーション、教師との関係、教師への期待など18項目を設定し5件法（1全くそう思わない～5大変そう思う）で回答を求めた。調査時期は2000年4月、調査対象者は日本文化（人文学部）専攻の1, 2部学生で、19歳から40代の学生100人（男性42人、女性58人）であった。結果として、社会人学生、あるいは年齢の高い学生のほうに大学教育に対する全体的な適応傾向が見られたが、留学生との接触経験の有無と大学教育への適応との関連性を示唆する結果も示された。接触経験のある学生のほうが、大学の教育方法、勉強の進捗状況、大学での研究・学習の満足度において、接触経験のない学生よりも適応傾向を示した。さらに、若い学生群でも接触経験のある学生はゼミ教員との関係もよかった。留学生の友人のいる学生については、全体的に大学教育の諸側面に適応傾向を示すことが本調査で明らかになった。

大学を取り巻く環境も十数年前とは少しずつ変わってきている。少子化傾向は変わらず、大学の統廃合、認証制度、教育研究改革が進み、留学生の30万人受入れ計画、欧米の入学時期と合わせた秋入学制度の検討といった制度や組織の刷新や改革が叫ばれる一方で、学生達の内向き志向や勉学意欲のなさ、授業態度の悪さなどの問題は相変わらず残されている。いかにして国内外の社会、文化に関心をもたせるか、学生達を満足させる授業を展開できるかという課題に我々大学関係者は直面している。授業シラバスの質的、量的な改善を求められ、自己点検・自己評価、さらに学生や第三者からの授業評価の導入の中で、学生自身の内的成長と自律性を促進するための教育的配慮にどれだけ目が向けられているだろうか。日本の学生は自律性という点で欧米、あるいは中国、韓国など東アジアの学生達と比べても見劣りすることがある。小・中・高の学校教育段階で自律性を養う教育が行なわれにくいこと、受身的な学習スタイルに慣れていること、さらに、異なる文化の人達との接触から学ぶ機会が少ないことなど教育環境にも原因がある。同時に、伝統的な日本人の考え方や行動が自律性の育成を阻むことも考えられる。本研究において、社会人学生の大学教育の諸側面への適応が確認されたが、彼らの大学進学の目的の高さと主体的な勉学への取組、つまり自律性は、それまでの社会生活と様々な経験を経て獲得したものと考えられる。もう一方の適応要因として確認できたのが、異文化接触経験であった。特に対象とした学生が人文学部日本文化学科生で、大学の就職対策のための性格診断テストでもっとも「内向き志向」と評価された学生達であったが、留学生との交流、接触の経験が大学教育の諸側面への適応につながり得るならば、大学時代により多くの異文化接触機会を経験してもらうことを大学関係者で協力して進めていくべきであると考えられる。

2. 日本人学生と留学生の異文化接触 その2——協働的活動を通じた意識変容

日本人学生と留学生の交流・接触は、留学生にとって日本文化への適応や学業成就に役立つことはもちろん、留学生と接触する日本人学生・教職員や地域住民の国際理解・異文化理解の促進にも貢献する相互裨益的な意義をもつ(江淵 1991)ものとされ、複数の文化が共存する教育環境を作ることは日本人学生にとっても、また当該大学にとっても意義があると思われる。

異文化接触がなぜ人の意識を変容させるのか。接触経験の特徴は、今まで内在化している価値観、行動、態度、感情などがそのままでは機能しなくなり何らかの調整が必要になる事態が頻繁に起こる(渡辺 1995)ことで、その頻度の高さと衝撃の強さは自らの文化ではあり得ないほどであるという。また、Berry J.W. *et al* (1992)は、異文化と自文化に対する態度を基準にして接触を4つのタイプ(「統合 integration」「同化 assimilation」「境界化 marginalization」「分離 separation)という、自他文化のアイデンティティの統合、相手文化への同化、周辺化、相手文化への拒否を示している。しかし、固定した分類ではなく、状況や相手との関係などにより変化するもので、自文化と異文化との間を行きつ戻りつ、螺旋的なプロセスをたどっていくようである。

日本人学生と留学生の接触には大学教育でのパートナーとして互いに自己成長していくことが効果として期待される。ここで問題なのは、どのような接触をしているかということである。接触が頻繁になされても互いに相手文化を理解していることには必ずしも結びつかない。接触の頻度と同時に深度も大切である。文化的な葛藤に至る経験をしなければ相手文化の受容にも行き着かないであろう。Weiss R.S. (1974)は、対人関係のタイプを垂直型と水平型に分類、前者を二者の力関係に不均衡が見られるタイプ、後者を対等、相互交流の成立するタイプとしたが、留学生と友人をもつ日本人学生は水平型関係を成立させたことになる。一方的でなく、双方が対等なパートナーとなり協力しあう存在となる。

神谷・中川(2002)の「日本人学生の異文化接触に関する研究」では、まず、異文化接触経験のある日本人学生群を対象に、彼らの行動に具体的にどう現われているか、また行動を規定する価値観との関連で〈変容〉を考察した。また、神谷・中川(2007)の「異文化接触と相互の意識変容に関する研究」では日本人学生と留学生の協働的活動事例(異文化交流サークルの活動)を取り上げ、活動過程と活動の実践者である日本人学生と留学生の相互の変容を捉えることを試みた。以下、それぞれの研究の具体的な内容と成果を示すことにする。

前者の「接触」研究では、留学生と接触経験のある学生群と接触経験のない学生群との比較により3つの課題を設定した——①各学生群のもつ文化的価値観と日常生活における実際の行動の乖離、②接触経験のある学生群の大学教育への適応と実際の行動との関連性、③接触経験を持つ学生の心的変化——研究方法は、札幌市内の日本人大学生184人(男性72人、女性112人)への質問紙調査【回収率100%】(調査1)と異文化接触頻度の高い学生10人に対するインタビュー調査(調査2)からデータを収集した。いずれも調査時期は2001年7月である。質問紙調査では、まず、価値観、およびそれと関連する状況の中で実際にどう行動を行なっているかを調査した。「価値観」は

ホフステードの価値観の概念を基に14項目、「行動」もそれと関連する14項目を設定し(注3)、それぞれ5件法【1全くそう思わない(全くしない)～5大変そう思う(いつもする)】で回答を求めた。また、「大学教育への適応度」としてR. BakerによるFSAを改訂した尺度(中川・神谷 2000)を用い、15項目を設定し、4件法(1あてはまらない～4全くそうだ)で回答を求めた。さらに、インタビュー調査として、友人関係形成の過程、過程で感じた異文化性、文化的差異とその対処法、留学生との友人関係からの学び、困難点などについて質問した。

表1 留学生と付き合いのある群と付き合いのない群の教育、人生、生活への価値観得点の平均値 (SD)

(価値観項目)	1	2	3	4	5	6	7
つきあいある A N=51	2.67 (1.18)	2.22 (.92)	2.20 (1.00)	2.18 (.99)	3.29 (1.12)	1.98 (.97)	4.35 (.84)
つきあいない B N=133	2.97 (1.06)	2.24 (.98)	2.29 (1.00)	2.23 (1.07)	3.05 (1.16)	2.08 (1.02)	4.10 (.99)

(価値観項目)	8	9	10	11	12	13	14
つきあいある A N=51	2.24 (1.27)	2.29 (1.24)	1.98 (1.29)	2.61 (1.10)	1.88 (.89)	1.73 (.85)	2.53 (.95)
つきあいない B N=133	2.52 (1.28)	1.95 (1.08)	1.96 (1.15)	2.70 (1.00)	2.08 (1.08)	1.81 (.92)	2.79 (1.16)

1 まったくそう思わない 2 あまり思わない 3 どちらともいえない
4 かなりそう思う 5 たいへんそう思う

価値観項目

- 1 教育の目的は学習の方法を学ぶこと
- 2 対人関係を保つため対決を避ける
- 3 自分のしたいことより組織に協力
- 4 人間関係より勉強や仕事を優先する
- 5 コミュニケーションは明瞭な言語で
- 6 指導教員は全主導権をもつ
- 7 学生は教師と学問上反論
- 8 教師は知識を伝える専門家
- 9 学生は教員に従順であるべき
- 10 男性は強く女性は優しい人間がいい
- 11 社会生活は細やかな規則をもつべき
- 12 人間関係より金銭や物質が大切
- 13 自分の生活より身分や業績の向上
- 14 最も優れた学生より平均的でよい

表1 留学生と接触あり群とない群の価値観得点 (平均値)

表2 留学生との付き合いのある群と付き合いのない群の大学生活での行動得点の平均値 (SD)

	行動1	行動2	行動3	行動4	行動5	行動6	行動7
つきあいある A N=51	2.06 (.99)	2.76 (1.14)	3.08 (1.11)	1.92 (1.07)	3.33 (1.16)	2.53 (1.33)	3.18 (1.23)
つきあいない B N=133	1.77 (.87)	2.48 (1.08)	2.60 (1.13)	2.23 (1.31)	2.76 (1.20)	2.37 (1.12)	1.97 (1.18)

	行動8	行動9	行動10	行動11	行動12	行動13	行動14
つきあいある A N=51	3.31 (1.14)	3.29 (1.15)	3.67 (1.19)	3.41 (1.20)	2.20 (1.10)	1.51 (.70)	2.20 (1.24)
つきあいない B N=133	2.65 (1.28)	2.99 (1.20)	2.92 (1.16)	3.30 (3.99)	2.86 (3.12)	1.79 (1.07)	1.82 (1.13)

(1 全くしていない～5 大変している)

行動項目

- 1 大学の勉強では具体的な指導を受ける
- 2 対人関係を大切に直接対決を避ける
- 3 自分より友人グループのことを優先
- 4 コンパなど勉強に支障きたすのでない
- 5 [言葉]で明確なコミュニケーション
- 6 自分の考えより教師の指示に従う
- 7 学問上教師に意見、反論もする
- 8 先生を人格より専門性で尊敬する
- 9 大学の先生にいつも従順
- 10 環境問題、社会福祉に関心をもつ
- 11 約束、規則、契約を細かに確認する
- 12 金銭、物質を第一に大切にして生活
- 13 自分の生活より学校の成績、出世優先
- 14 大学では優秀な学生になるよう努力

表2 留学生と接触あり群とない群の行動得点 (平均値)

その結果、価値観については接触経験の有る学生群とない学生群による違いがあまり見られなかった(表1を参照)のに対し、行動については両群で差が見られた(表2を参照)。両群の比較のためにT-検定を行なったところ、コミュニケーションに関連した項目などで有意差が見られた。接触経験のない学生群では「項目5: コミュニケーションは常に言葉で明確に」や「項目7: 学問上、教師に意見、反論もする」は、

価値観では肯定的であったが、実際行動としてはあまりしていないことが示された。一方、接触経験のある学生群では、コミュニケーション場面ではっきりと明確な行動をとっている（表2を参照）。理想（価値観）と実際行動との間にあまり乖離がないことになる。しかし、「自分より友人グループを優先」（項目3）、「コンパなどへの参加」（項目4）、「環境問題、社会福祉への関心」（項目10）といった、個人よりも集団、社会との関わりを行動に示す積極性が窺われる。留学生とつきあっている過程では明確なコミュニケーション行動が要求され、理想的な考えを行動に反映させることが留学生との信頼形成に重要になってくると思われる。

次に、大学教育への適応との関連では、「項目1：大学での勉強の進捗状態」「項目6：大学での勉強が将来の仕事に役立つ」「項目8：最近不安になる」「項目10：大学の先生に気軽に話しかけられる」「項目11：勉強以外の諸活動への参加」といった項目について、接触経験のある学生群のほうが適応傾向を示した。特に、「諸活動への参加」は両群に有意差（ $p < 0.01$ ）が見られ、留学生との様々な交流活動の実践から学びの場を広げていることが推察される。以上の調査結果をより具体的に深く考察するために、留学生・外国人と深い交流を持っている学生10人にインタビューも行なった。紙幅の関係で具体的な資料の紹介は省略するが、交流成果として、コミュニケーション能力の向上、異文化性の学び、異文化への寛容な態度、異なる価値観への対応などを認識したことがわかる。学内では2000年に日本人学生と留学生が合流して活動する「異文化交流サークル（注4）【現在は、Global Interchange, Friendship and Teamwork (G.I.F.T.)と改称】」が設立され、現在に至るまで活動を続けている。様々な協働的活動の中から日本人学生と留学生は何を学び、意識の変化に至るのか。協働的活動を通じた意識変容についての研究（神谷・中川2007）を次に紹介する。

本研究では、日本人学生と留学生の協働的活動を「双方が対等な立場で信頼関係を構築し、協働で課題遂行することを目指す活動」と定義した。大学コミュニティにおいては留学生は周辺的な存在で、サポートの対象であると考えられがちであり、中心的な地位をとり活動することはまれである。しかし、多くの先行研究で報告されるように、交流によりパートナーシップを形成するためには、双方が対等で互恵的な関係を築くことが必要である。日本人学生と留学生の協働的活動の始まりには「出会い」の機会がある。大学では学校行事の新入生歓迎コンパ、オリエンテーション、チューターの援助、授業、サークル活動などが出会いの機会となり、異文化接触の開始を意味する。その後、個人間または集団による対人関係が構築され、活動が進展していく。双方が共通の目標に向かい、協働で課題を遂行していくこと、活動の連鎖により高次の活動を作り出すことが協働の意味であると捉えている。

調査は協働的活動の進展を1年間にわたり観察し、日本人と留学生から8人ずつ活動のリーダーに対しインタビューを行なった。観察期間は2006年4月から2007年3月までの間で、インタビューは観察期間中に行なった。さらに、ホフステードの価値観概念を援用し、学生達が実際に出会う大学教育場面、日常生活場面を想定して作成された「価値観」、「行動」を調べる質問項目を用意した。すでに、2000年、2002年調査に用いられており、その信頼度が得られている。質問紙調査は、本学に在学する日本人学生135人と留学生75人（国籍：中国、韓国）を対象に、2006年9月に実施し

た。以下は、学内の留学生会と異文化交流サークルとが繰り広げた協働的活動の内容およびリーダーへのインタビューと「行動」に関する質問紙調査から得られた分析結果である。

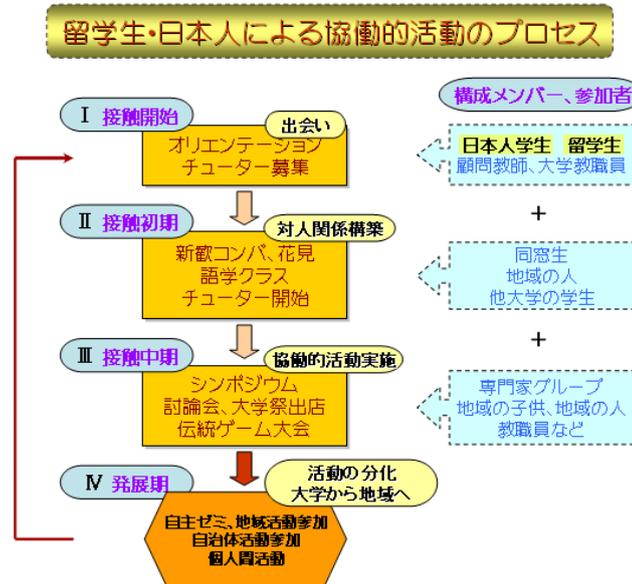


図1 協働的活動の段階的進展と活動の参加者

図1はこの2つのグループが出会い、交流を深めながら協働的活動を展開する様子と活動の参加者を示したものである。まず、(1)接触開始の段階では、留学生のための新入生オリエンテーションがあり、そこで大学教職員、先輩留学生、異文化交流サークルの日本人学生から学業面と生活面を支える情報やアドバイスを受ける。また、キャンパスツアーでは大学施設の案内と具体的な説明を受ける。チューターとの出会い、話し合いがこの段階で始まる。次に、(2)接触初期段階では、新入生歓迎コンパ、花見、年次活動計画会議、チューター開始、留学生による語学教室の開講、料理講習会などがある。この段階では互いの文化発信の機会が多くなり、異文化への気づき、葛藤、あるいは学びあいから対人関係構築へと発展が見られる。入学から3～4カ月が経ち、(3)接触中期の段階では、夏から秋のシンポジウムや大学祭出店のための企画会議、準備会、実施、反省会という一連の活動の中で、仕事の進め方などで意見対立が頻繁に起こり、双方に葛藤が生まれる。しかし、双方のリーダーが時に仲介役を果たし、相互理解を促すこともあり、課題達成のために協力することの重要性が認識される。反省会、打ち上げパーティでは達成感を共有し、仲間の絆を確かめ合い、双方が協働的活動の意義を認識し合うことが観察される。最後の(4)発展期では、個人的ニーズによる自主的な活動が生まれてくる。自由な発想を具体化する積極性が見られ、一つの活動が次の活動を生み出す「足場づくり」になっていることが観察される。自主ゼミ、討論会、地域住民とのスポーツ大会など活動の分化が見られる。

次に、リーダー達へのインタビュー内容の分析から、以下の表3、表4に、「葛藤」「対処方法（方略）」「学び」を抽出した。「葛藤」では《コミュニケーション》《仕事

のやり方》《時間間隔》《対人関係》の4カテゴリー別に30項目、「対処方法（方略）」と「学び」ではそれぞれ9～10項目挙げられた。

(葛 藤)

	留 学 生	日本人学生
コミュニケーション	言語表現の不明瞭さ・日本人は皆同じ意見・真意がつかめない・ディスカッションができない・異なる意見への不寛容・日本語能力不足への配慮がない	空気が読めない・真意が伝わりにくい・直接的表現・日本語理解の度がわからない
仕事のやり方	全てが細かすぎ・臨機応変がない・他人への気配りがない	緻密さの欠如・ルールを無視する・計画性がない
時間感覚	余裕がない・会議の時間が長い	時間を守らない・時間配分ができない・出足が遅い
対人関係	先輩、後輩の関係が理解できない・教師への尊敬の念が薄い・自己開示度が違う・お礼、挨拶が過剰	友人関係が過剰に親密、お礼の表現が不十分、年齢を無視した態度

表3 留学生と日本人学生へのインタビュー分析——(1)葛 藤

(対 処 方 法)

留 学 生	日本人学生
<ul style="list-style-type: none"> ・相手の意図を理解する努力 ・説明、説得の努力 ・社会的ルールなどについての知識をもつ ・寛容性（文化の違いを認める）をもつ ・議論の進め方など予め相談する ・計画的に物事を運ぶ努力 	<ul style="list-style-type: none"> ・説明努力を行なう ・相手の意図をよく聞く ・異なる意見に対する寛容性をもつ

(学 び)

留 学 生	日本人学生
<ul style="list-style-type: none"> ・言外の日本語への気づき、学び ・日本語コミュニケーション能力向上 	<ul style="list-style-type: none"> ・発想の広がり ・交渉能力の向上、工夫を行なう ・あきらめない気持ちをもつ
<ul style="list-style-type: none"> ・相手文化の深さ、文化的差異の学びがあった ・大学での勉強の仕方を学ぶ（留学生）、大学での学習への意欲（日本人学生） ・豊かな言語表現力 ・友人関係の構築 ・寛容な態度の育成 	

表4 留学生と日本人学生へのインタビュー分析——(2)対処方法～学び

最後に、留学生・日本人学生の協働活動の有無別による「行動」得点を表5に示す。

実際行動に関する項目	留学生 活動無 27人	留学生 活動有 48人	日学生 135人	リーダー 日8人	リーダー 留8人
1 教師に具体的な指導を受けている	2.640	3.250	1.918	1.400	3.143
2 周りの人達との対立回避に努める	2.920	3.083	2.545	2.600	3.429
3 友人や所属グループを優先する	3.160	3.271	2.799	3.200	2.286
4 親睦会などに積極的に参加する	2.760	3.208	1.948	5.000	2.571
5 教師や友人に言葉で明確に伝える	3.520	3.500	2.485	2.800	3.286
6 課題は教師の指示通りに進める	2.760	3.063	2.358	3.400	3.000
7 教師と意見が異なる時説明、反論	2.640	2.750	1.699	1.800	2.286
8 教師を知識、専門性において尊敬	3.240	3.521	2.604	3.600	2.857
9 教師に従順な態度で接している	3.520	3.354	3.083	4.200	2.571
10 環境、福祉問題に関心を持って行動	2.840	2.938	2.858	3.000	2.286
11 規則、契約等は確認し、生活する	3.600	3.604	2.910	2.800	3.000
12 金銭や物質は第1と考え生活する	2.600	2.417	2.134	2.400	2.286
13 成績向上、出世を付き合いに優先	1.500	1.750	1.477	1.200	1.143
14 優秀だと評価されるよう頑張る	3.455	3.208	2.194	2.600	3.429

(5件法による回答 1まったくしていない～5完全にしている。各項目の得点の平均値を表にまとめた)

表5 留学生・日本人学生の交流活動の有無別による行動得点の平均値

表5で興味深いのは「教師からの具体的な指導」(項目1)に留学生と日本人学生の差が見られることである。特に、留学生の活動有群で教師の指導を必要としていることが窺われる。一方、日本人学生はリーダーも含め、教師の指導を必要としないか、あるいは自律性の高まりとも考えられる。また、コミュニケーションに関する項目では、「教師や友人に言葉で明確に伝える」(項目5)に対し、留学生と活動のリーダー両群の平均値が高くなっている。留学生は言葉で伝える教育を受けており、日本人学生との差異が現われている。ただ、日本人リーダーは一般の日本人学生よりも得点が高い。「教師と意見が異なる時の説明、反論」(項目7)についても、留学生とリーダー両群のポイントが一般の日本人に比べて高い。さらに、「専門家として教師を尊敬する」(項目8)や「優秀な学生だと評価されるよう頑張る」(項目14)でも、日本人学生よりも留学生と活動リーダー両群のポイントが高い。活動を経験した留学生と両群のリーダーの大学教育への適応が示されるものとして興味深い。

3. まとめ——日本人学生と留学生の異文化交流の成果と今後の課題

本稿の表題が示す通り、本研究では日本人学生の大学適応から始まり、留学生との交流、接触と大学適応との関連性を探ってきた。国内の多くの大学、自治体では外国人との共生を目指そうとここ十数年の間様々な活動が試行され、その中で留学生と日本人の協働(または共働)を通じた相互理解や意識変容をテーマにした事例研究も盛

んに行なわれるようになった。交流から協働へと研究者や交流担当者の関心が移ってきている。それとともに、留学生や外国人定住者への支援という一方向の関係から対等な双方向の関係の構築が、グローバル化、あるいは多文化共生化を目指す今日の社会に求められていると言える。

大学教育における日本人学生と留学生の交流成果については、合同授業、討論会、交流会などの協働的活動を積極的に取り上げた研究が現在も報告されている。今後も継続的に具体的な活動事例を取り上げ、その過程を観察分析していくことが求められる。そのためには、研究のために一時的な活動の場を捉えるのではなく、日常的かつ自然な協働的活動の場を見据えることが必要である。その意味で、本学の国際交流サークルは日本人学生と留学生の協働的活動の場として注目される。2000年6月に学生自治会サークル「異文化理解研究会」として発足し、現在は「Global Interchange, Friendship and Teamwork (G.I.F.T.)」と改称されているが、11年間にわたり留学生会とともに協働的活動を日常的に行なっている。彼らの活動は学内だけでなく地域にも広がり、活動の連鎖が起こっている。学生、教職員、地域の人々との協働によりコミュニケーション能力、社会性、対人関係調整能力が育成され、人間としての成長が期待される。しかし、留学生と日本人学生が対等な関係で活動を維持、発展させるためには、活動を理解する助言者、協力者の存在が不可欠であろう。顧問教師、地域の専門家はそれぞれの専門知識と経験を伝授し、活動を豊かにするリソースとして欠かせない。彼らの活動を進めるための環境づくりを大学教育や地域の関係者が担えるように働きかけていきたい。また留学生との接触・交流の問題解決のために、今後も接触の様々なタイプ、事例を取り上げ、多様な要因の相互関連性を捉えていくことが必要である。

留学生交流がグローバル化する日本社会にとって貴重なリソースとなり、新たな価値を生み出すものとなるためにも、今後とも研究の更なる進展を望みたい。

【注 釈】

1. R. Baker(1981)による[Freshman Scale of Adaptation to University] (大学新入生の適応尺度)を上原(1988,1992)、神谷(1998)が環境移行時の適応調査用に改訂したもの。
2. オランダの社会心理学者、Geert Hofstede(ホフステード)は、50カ国と3つの地域のIBM社員を対象に価値観調査を行ない(G. Hofstede 1986 ;ホフステード 1995)、因子分析等により文化に関する4つの次元(権力格差/個人主義・集団主義/男性らしさ・女性らしさ/不確実性の回避)を抽出、文化的相違を説明する概念として用いた。
3. 「価値観」と「行動」に関する調査項目の文言は多少異なるが、前者は「そうすべきと思う」であり、後者は実際の行動が「そうしている」かを問う形式になっている。
4. 学生自治会(文化協議会)に所属するサークルで、2000年から「異文化理解研究会」として活動を開始した。一般の学生により親しみがもてるよう、2010年にG.I.F.T.(Global Interchange, Friendship and Teamwork)と名称を変更し、現在に至っている。

【参考文献】

- 岩男寿美子・萩原滋（1988）『日本で学ぶ留学生—社会心理学的分析』、勁草書房
- 上原麻子（1992）『外国人留学生の日本語上達と適応に関する基礎的研究』（平成2年度文部省科学研究報告書）
- （1988）「留学生の異文化適応」『言語習得及び異文化適応の理論的、実証的研究』広島大学教育学部
- 江淵一公（1991）「在日留学生と異文化間教育」『異文化間教育5』アカデミア出版会
- 加賀美常美代（2007）『多文化社会の葛藤解決と教育価値観』ナカニシヤ出版
- 神谷順子・中川かず子（2002）「日本人大学生の異文化接触に関する研究—留学生との接触経験による意識変容について—」『北海学園大学学園論集』第111号
- 神谷順子・中川かず子（2007）「異文化接触による相互の意識変容に関する研究—留学生・日本人学生の協働的活動がもたらす双方向的効果—」『北海学園大学学園論集』第134号
- 倉地暁美（1998）『多文化共生の教育』勁草書房
- 関道子（2003）「外国人留学生と日本人受入れ側の異文化接触による相互の意識変容に関する縦断的研究」平成10～13年度科学研究費補助金研究 成果報告書
- 田中共子（2000）『留学生のソーシャルサポート・ネットワークとソーシャルスキル』ナカニシヤ出版
- 田中共子（1996）「日本人チューター学生の異文化接触体験(2)その役割と異文化接触に関する質問紙調査」『広島大学留学生センター紀要』7
- 中川かず子・神谷順子（2000）「大学生の教育・生活に関する態度と価値観、並びに大学教育に対する適応」『北海学園大学学園論集』第106号
- 星野命（1992）『クロスカルチャー思考への招待』読売科学選書
- ホフステード（1995初版）『多文化世界』（岩井紀子・岩井八郎訳）有斐閣
- 水野治久（2003）『留学生の被援助志向性に関する心理学的研究』風間書房
- 箕浦康子（1998）『日本人学生と留学生：相互理解のためのアクションリサーチ』平成7-9年度科学研究費補助金研究 成果報告書
- 横田雅弘（1998）「留学生と日本人学生の異文化間教育」『現代のエスプリ』377 至文堂
- 横田雅弘（1991）「留学生と日本人学生の親密化に関する研究」『異文化間教育』5 アカデミア出版会
- 渡辺文夫（1995）『異文化接触の心理学』川島書店
- Baker, R.W. (1981) "Freshman Transition Questionnaire" Research Manuscript, Clark University
- Berry, J.W. et al (1994) *Cross-Cultural Psychology*, Cambridge University Press
- Brislin, R. (2000) *Understanding Culture's Influence on Behavior*, Harcourt College Publishers
- Hofstede, G. (1986) "Cultural Differences in Teaching and Learning", *International Journal of Intercultural Relations* 10
- Weiss, R.S. (1974) "The Provisions of Social Relationships" In Z. Rubin (ed), *Doing unto Others*, Prentice-Hall